

氏 名 (本籍)	濱 田 真 (東京 都)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 2518 号
学位授与年月日	平成 22 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	ヘルダーの Bildung 思想研究 －啓蒙主義期の諸思想との関係を中心に－
主 査	筑波大学教授 Dr. Phil. 畔 上 泰 治
副 査	筑波大学准教授 博士 (文学) 武 井 隆 道
副 査	筑波大学准教授 Ph. D. (レトリック) 対 馬 美 千 子
副 査	法政大学文学部・大学院人文科学研究科教授 笠 原 賢 介

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文はヘルダー (Johann Gottfried Herder 1744-1803) の *Bildung* 論の思想的射程を 18 世紀ドイツ啓蒙主義期の諸思想との関係に焦点を当てて考察し、*Bildung* 論を中心としたヘルダー思想の多面的な全体像の究明を目指し、現在でも広く見られる一面的なヘルダー理解に修正を迫るものである。この目的を達成するために、本論文ではヘルダーの思想を 19 世紀以降確立した精神諸科学の専門分化した視点から位置づけるのではなく、彼の生きた 18 世紀ドイツにおける諸思想との複雑な交流の動きの中で分析するという方法がとられる。とくに 18 世紀の中心思想である啓蒙主義思想とゲーテの思想に注目し、それらとヘルダーの関係に焦点を絞って考察が進められる。すなわち、啓蒙主義期における *Bildung* をめぐる多様な言説が 18 世紀後半の思想状況のなかでヘルダーにどのような形で批判的に受容され、発展させられたのかが、人間学、言語論、歴史哲学という三つの主題の下に考察される。

I. 第 1 部 ヘルダーの *Bildung* 論の人間学的基盤 (第 1 章～第 3 章、補論 1、補論 2)

論者はまず、これまでのヘルダー受容の問題点と研究の特徴、本論文の目的・方法、さらには *Bildung* 概念の歴史に関する予備的な考察を「序」において述べる。続く第 1 部では、ヘルダーの *Bildung* 論の特徴が「人間学」(Anthropologie) の観点から考察される。第 1 章では、18 世紀後半に多くの思想家の関心を集めた「人間の使命」(die Bestimmung des Menschen) をめぐる問題が取り上げられる。論者はこの問題についてのシュバルディング、メンデルスゾーン、アプトの認識と、彼らの思想とヘルダーの関係について考察を行う。そして論者は、シュバルディング、アプト、メンデルスゾーンの思想には、それぞれ神学的人間学、懐疑主義の人間学、合理主義の人間学という 18 世紀後半のドイツにおける人間学の三種類のあり方が反映していること、またヘルダーは基本的にはアプトの立場に共鳴し、メンデルスゾーンには批判の目を向けて独自の論を展開していること、さらにヘルダーの立論の特徴が、批判の対象を自らの内に取り込んでそれに接続する形をとっている点にあることを明らかにする。そして、ヘルダーの人間学の土台には当時の神学的問題、社会的・懐疑論的問題、合理主義的・形而上学的問題があるとの知見を示す。

第2章では、古代ギリシアに発しその後のヨーロッパ思想においても大きな位置を占めていた「存在の連鎖」という宇宙観・自然観を手がかりにヘルダーの人間学の思想的背景が考察される。論者は、ポープの『人間論』では人間が神と獣、理性と感性の中間者として位置づけられていること、また当時知識人の代表とされたニュートンを猿とする「猿のニュートン」という表現が見られることに注目する。論者はまず、この表現が前批判期のカントの『天界一般自然史』とヘルダーの書簡にも表れていることを手がかりにして、中間者としての人間という考え方が、ポープと前批判期のカントを通してヘルダー思想に受け入れられたとの知見を示す。続いて論者はラーヴァターの観相学に対するヘルダーの批判を手がかりにして、ヘルダー思想の独自性を検証する。そして、ヘルダーにおいては存在の連鎖が空間的のみならず時間的に理解され、時間的な変化の相に人間が置き入れられていること、また人間の漸進的で終わりのない「完成化の過程」に目が向けられている点にヘルダーの人間学の独自性があるとの知見が示される。

第3章では、論者はこのような人間論の基礎にヘルダー固有の感覚理解があることに着目して、彼の感覚論についての考察を進める。そして、ヘルダーの感覚論が理性対感性という対立図式の中で成立するのではなく、理性と感性を共に含む包括的な理論であり、それは当時支配的だったヴォルフ学派の合理主義的人間理解の一面性を批判して人間の全体性の回復を試みるものであったとの知見が示される。

補論1では、ヴォルフとヘルダーの Bildung 論の相違について考察がなされ、また補論2では、ゲーテとヘルダーの Bildung 論の類似点と差異点が、触覚と視覚についての議論を手がかりに考察される。

Ⅱ. 第2部 ヘルダーの言語論と Bildung 論 (第4章～第6章)

第2部では、言語に対する視点からヘルダーの Bildung 論が考察される。第4章では、ドイツ啓蒙主義期の合理主義的文芸運動の代表者とされるゴットシェートの言語論がヘルダーの言語観に与えている影響が考察される。そして論者は、言語の働きに対するヘルダーの捉え方には二重性があること、すなわち、ヘルダーは人間の言語に感性的な働きと合理的な働きを同時に見出していること、そしてこうした言語観には当時の経験主義的な思潮と合理主義的な思潮の融合が認められるとの知見を示す。

第5章では、ヘルダーの神話論と啓蒙主義的神話論との関係が考察される。論者は、神話を文化的保管庫と認識し、神話は言語を通じた人間と世界との関わり方を探るうえでの重要な手がかりであると位置づけるヘルダーの神話観の形成背景を考察し、そこには文芸論を巡る当時の議論がとり入れられていることを明らかにしている。

第6章では、言語と Bildung の問題が当時の文芸的公共性の問題、とりわけ作家と読者の関係の問題との関連から論じられる。論者はまず、啓蒙主義期は作家の社会的立場が確立する過渡期とも言うべき時期であり、この時期に啓蒙主義的政策による識字教育の拡大や書籍出版の簡便化によって読書行為は急激に一般市民の間に浸透し、また同時に朗読から黙読へと読書形態の変化も認められるとの時代認識を示す。そしてこのような社会的な状況下でヘルダーが書くことと読むこと、作家と読者をどのように捉えていたのかを Bildung の問題と関連づけて分析する。

Ⅲ. 第3部 ヘルダーの Bildung 論の歴史哲学的側面 (第7章～第10章)

第3部では、Bildung の歴史哲学的側面についての考察がなされる。論者は、ヘルダーが言語による人間形成の特徴を、伝統的世界観を受容すると同時にその世界観を創造的に変革するという二面性に認めていることを指摘し、これは言語による伝統の受容と革新の問題であること、またそこにはヘルダー固有の歴史意識が深く関わっているとの知見を示す。

第7章では、イーゼリンの啓蒙主義的歴史認識を取り上げて、啓蒙主義的歴史哲学に対するヘルダーの歴史論の特徴が論じられる。そして、ヘルダーは人類史における Bildung が、決してなだらかな直線的な進展

ではなく、その内には何重もの断絶の層が含まれること、しかし同時にその断絶の間には響き合いの可能性があると認識していたとの知見が示される。

第8章では、論者は歴史哲学に関するヘルダーの主著『イデーン』に対するカントの批判を手がかりにヘルダーのアナロジ的思考様式の特徴と、歴史哲学的考察におけるその重要な役割を指摘する。第9章では、1780年代以降ドイツで行われたスピノザ論争に目を向けて、ヘルダーのスピノザ受容のあり方が具体的に検証される。論者はその中から、人類史と自然史を重ね合わせて論じるヘルダーの歴史哲学の特徴は、ヘルダーのスピノザ哲学受容と密接に関係しているとの知見を導き出す。第10章では、ヘルダーの歴史哲学が「歴史の形態学」とも呼べるものであるとの知見が、ヘルダーとゲーテの1780年代の思想交流に、とくにヘルダーの歴史哲学構想とゲーテの形態学構想との相互関係に焦点を当てながら示される。

最後に、「結語」ではこれまでの考察を通して得られたヘルダーの Bildung 論に認められた主要特徴がまとめて挙げられ、その全体像が提示される。論者はその中で、ヘルダーの Bildung 論はそれが論じられる文脈に応じて18世紀およびそれ以前のヨーロッパの多様な思想・芸術問題と重層的に結びついていること、またそれがヘルダーの思想ポテンシャルの高さになっているとの知見を示す。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、文学にとどまらず、哲学や美学、教育学、言語学、歴史学など多くの分野に関わる著作を残して後世に大きな影響を与え続け、また文化間の衝突や共存が問題となっている今日において、地球上の多様な文化の共存を説いた先駆者として注目されているヘルダーの思想を、Bildung という概念を軸に、彼の初期から後期に及ぶ膨大な著作に分け入って分析し、その全体像の把握と再評価を試みたものである。

ヘルダーの全体像に関しては、19世紀末から20世紀中葉にかけて成立した、ヘルダーをドイツ・ナショナリスト、非合理主義者とみなす理解が現在も残っている。すなわち、ヘルダーは西欧の啓蒙の合理性を批判して、非合理性を核とするドイツ的精神の展開に道を開いた著作家であるとの理解が払拭されていない。とりわけ、ヘルダー思想における合理性と厳密性の欠如を指摘したカントによる批判は今日においてもなお一般に引き継がれている。

しかしながら、このようなヘルダー像は、1980年代半ば以降、ドイツを中心に様々な角度から見なおされ始めている。本研究は、ヘルダーに関するこのような新しい研究動向を踏まえたものであり、それは旧来のヘルダー理解がなお根深く残る我国において、ヘルダー思想に対する再評価への道を切り開く画期的な作業となっている。すなわち、本研究は、2002年に刊行されたヴォルフガング・プロスの『イデーン』注釈など、ヘルダー研究の最新の動向に呼応している。論者はその論述の展開において、啓蒙対反啓蒙という旧来の図式を取り払って、また、非合理主義者ヘルダーという定型的理解を批判して、ヘルダーを、ポープ、ゴットシェート、ヒューム、ヴィンケルマン、イーゼリン、カントなど18世紀の思想潮流との交流の脈絡のなかで詳細に考察するだけでなく、和辻哲郎や坂部恵など、我国におけるヘルダー受容・評価をも視野に収めている。

また、本研究はヘルダーに関する個別研究という枠を超えた意義を併せ持っていることも指摘されなければならない。すなわち、本研究において扱われている人間学 (Anthropologie) への考察は、90年代以降のドイツにおける18世紀研究の焦点の一つである人間学の成立の問題を、ヘルダー研究という角度から究明し、貢献するという位置を持っている。現代における哲学的人間学の再評価を考慮する時、本研究の意義の大きさが高く評価されよう。

歴史、風土、フマニテート、身体など、本研究において呈示されているいくつかの主題群に関しては、さらなる展開が今後の課題として残されているとはいえ、本研究によって現代的な水準でヘルダーを再評価す

るための基礎が敷かれたとすることができる。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。